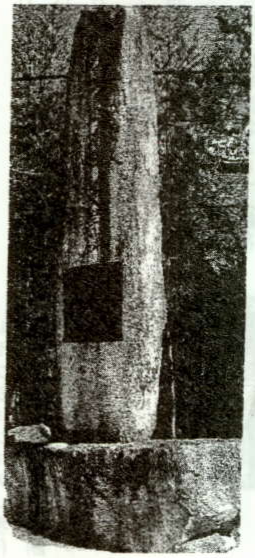
おのちゅうこうの

望郷の碑



国道百二十号の椎坂峠に、高さ七メートルの花崗岩の碑が立っている。

望郷の詩人おのちゅうこう文学碑

講談社社長野間省一書

と力強い筆致の文字が刻まれており、さらにその下に、黒御影のパネルがはめ込まれ、おのちゅうこうの詩「望郷」の一節を刻んでいる。

山川いかに
清くとも
語る人こそ
望まーき
さびーきときぞ
都べに
ふるさとの友の
名を呼ばむ
おのちゅうこう

椎坂峠からは、おのちゅうこうの生まれた白沢村を始め、沼田盆地が一望に見渡され、さらには雪の山々の連なりが遠望できる。雪の中に建つ文学碑は、望郷の詩人、おのちゅうこうの心を今に伝えるごとく直立して、ふるさとの山河を見守っている。

おのちゅうこうは、明治四十一年二月の生まれ、師範学校卒業後、県内の小学校に勤めるが、文学への夢やみ難く、昭和十五年、教職を退任して文学一筋の道に進み、主に詩や童話を書いた。詩も童話も、人間や動物、そして郷土への愛情に貫かれている。ちゅうこうは、詩は郷愁のこころであり、かなしくもかぎりない愛情の表白であると常に訴えていたという。

童話集『風は思い出をささやいた』にて野間児童文学賞を受賞した。その頃、建碑の話が出ていたので、受賞パーティの席上で、酔った勢いで省一社長に抱きつき「承知しないと離さない」と無理にお願いして、碑文を揮毫してもらったという。滅多に碑文など書かなかった省一社長だが、筆運びは雄大で「望郷の碑」に相応しい字である。その縁で、毎年行われる「望郷祭」には講談社からも幹部が参加しているとのことである。

野間清治「生誕の碑」の建立計画が地元桐生で持ち上がっている、講談社にも縁のある「望郷の碑」を見に行って来た。紹介する。

甦れ埋れた文化財　～その2～

石鴨の将軍地蔵

将軍地蔵は、地蔵菩薩の異像である。鎌倉時代にわが国に伝えられた蓮華三昧経に「頭に空寂の甲をいただき随求陀曼陀羅尼の鎧を着し、金剛智の太刀に、発心修行をかざし、悪行煩悩の軍を切る剣を持つ」悪行煩悩の軍に勝つ地蔵という名から、戦勝をもたらすとして、中世武士の信仰を得ていました。

梅田石鴨の丸彫勝軍地蔵もこの類に属し、甲冑に身を固め、右手に三又鉾左手に宝珠を持ち、埴輪のような馬にまたがる童顔の勝軍地蔵であります。八角形の台座は半ば埋もれているが「宝暦六年石鴨」と読めます。

近くの道祖神より2年遅れて立てられた事が判明した。像も省略化された彫りに素朴な味わいのある秀作であるばかりでなく、群馬県内に数基しかない珍しい石像で、大切に保存したいものです。

早春の旅　あなたもいかが！

みなと横浜、過去・未来

早春一日横浜の過去と未来にタイムスリップして見ませんか！安政6年西洋文明の窓口として発展し、現在350万人の人口を有し昔と今が織りなす魅力ある日本の代表的な街です。本牧海岸に沿った山や谷の自然の美しさ、そこに広がる三渓園・みなとみらいのレジャー施設。地上70階のランドマークタワーパノラマ・ベイブリッツジの光の帯びなどのオブジェクトは印象的であります。異国情緒の華僑貿易商が発展させた中華街でのお食事もまた至福のひとときへ誘ってくれます。あなたをお誘いいたします。

参加費7、500円　　期日3月26日

電話にて図書館へお申し込み下さい。電話47－4341